

テキスト ヨハネによる福音書13章12～20節

足を洗う主イエスの御業をきっかけにして、足を洗う主イエスの姿を模範とすることが教えられている御言葉です。

〈後で分かることと今分かること〉

奴隷になられて足を洗う主イエスの姿が十字架の御業を指し示していることは、今は分からないこと、後で分かるようになることでした(7)。その「後で」とは、聖霊降臨(ペンテコステ)にはほかなりません。主イエスが復活され、天に上げられ、聖霊が弟子たちの群れに与えられて、その聖霊によって十字架の真理が分かるようにされたのです。しかし、聖霊が与えられてなお、私たち人間の理解は未熟であり、不十分です。私たちが十字架の真理を悟るとは、キリスト者の生涯をかけて、信仰の歩みの中で徐々に徐々に分かってくるものです。本当の意味で主イエスの十字架の真理が十分に分かるとは、天上の主イエスにまみえてはじめて与えられる恵みなのでしょう。

そして、ここで足を洗う主イエスの姿から学ぶべきことがもう一つあります。主イエスは、「わたしがあなたがたにしたことが分かるか」(12)とおっしゃって、この12節以下では、「いま分かる」ことを求めておられるのです。12節以下の御言葉の焦点は、主イエスの十字架ではなく、主イエスを模範として生きることにあります。主イエスを模範として生きる、それは、十字架の真理が十分に分かってから始めるというものではない、「いま」すぐに、主イエスを模範として生きる生き方を始めるべきなのです。

〈互いに愛し合うこと〉

主イエスは、「先生」また「主」と呼ばれる御自身が弟子たちの足を洗ったことを取り上げて、「あなたがたも互いに足を洗い合わなければならぬ」とお命じになりました(14)。主イエスは、弟子たちに対して模範をお示しになったのです。

それは、互いにへりくだって仕えあうということです。誰が偉いのかと言い争うのではなく、互いに謙そんにへりくだることが求められるのです。

主イエスがへりくだって足を洗ってくださった、それは、弟子たちを愛して、愛し抜かれたからです(1)。弟子たちを愛して、その愛の故に、十字架を引き受けて、罪の洗いを成し遂げてくださいました。ですから、ここで主イエスが命じておられることは、互いに愛し合うということにほかなりません。使徒パウロも、互いに愛し合い、へりくだることの根拠を主イエスの十字架のへりくだりに求めました(フィリピ2:1-8)。主イエスの十字架の故に、すなわち神の愛の故に、キリスト者は互いに愛し合う。これが、主イエスによって足を洗われた者の新しい掟なのです。

〈愛がすべてを完成させる〉

罪を悔い改め、主イエスを信じる信仰を与えられている私たちです。私たちは、洗礼を授けられ、その水の洗いの故に、神の御前に罪赦され、義とされ、まったくきよくされていると確信することができます。それはもちろん、完全聖化ということではありません。しかし、キリスト者はキリストの義の衣をいただいて、神の御前に聖なる者として立ち得る幸いにあずかっているのです。

その私たちの地上の歩みは、主イエス・キリストの恵みに感謝して、主イエスを模範として歩むところに成り立ちます。神を信じて信仰に生きるものであり、またへりくだって人に仕えて生きるのです。神を愛し人を愛する、その一つの愛に生きるということにほかなりません。愛こそ律法を完成させるのであり、「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である」(コリント二13:13)とあるとおりです。十字架の道は愛の道なのです。

(望月 信)

カテキズム 子どもカテキズム問32,33

子どもカテキズム

問32 救われたあなたはどうなりますか。

答 聖化の歩みを始めます。

問33 聖化の歩みとは何ですか。

答 神さまの子どもとして、

罪に死に、神さまの御子イエスさまのお姿に似せられていくことです。

神さまに愛されている喜びのうちに、私たちも神さまを愛して歩みます。

聖化とは、清くなるための自己訓練ではなく、キリストと一つに結ばれること（神秘的な結合）の深まりである。キリストとより深いところで結びついた者は、自ずとキリストにより深いところで似る者となる。キリストの贖いの恵みに感謝するなかで、聖霊なる神の働きによって、キリストに似る者へと変えられる恵みである。

キリストに似るとは、二つの段階がある。一つは、謙卑のキリストに似ることである。地上におけるキリストの歩みは、神の御子として父なる神の御心に従うことにあった。父なる神への服従をもって、ご自分が神の御子であることを表された。私たちも神の子とされ、父なる神に服従することにおいてキリストに似た者となるのである。

その際、神に従いたくない罪と日々戦わざるを得ない。罪に死ぬことがキリストに似る道である。これは、キリストご自身がゲッセマネにおいて自分の思いではなく、父なる神さまの御心を求めて折られたことに表れている。また、キリストに似るとは、キリストが受けられた迫害をも身に受けることである。聖化は自分が立派になる自己実現の道ではない。自分の思いとは異なる様々な試練や迫害を受けることを通して、十字架の死に至るまで従順であられたキリストに似るのである。虐げられる中で、憎しみに生きるのではなく、キリストから柔和さと謙遜さを学ぶのである。

また、聖化は、自分の命を捨てて友を愛したキリストの道を歩むことである。仕えられるためではなく、仕えるためにお出でくださったキリストに似るのである。互いに愛し合いなさいというキリストの戒めは、キリストが仕えてくださったこ

とへの感謝によって実行されるものである。愛し合うとは、仕え合うことである。互いに仕え合う姿のなかに、キリストの似姿が宿っている。

そして、大切なことは、キリストの父なる神の愛顧のうちにキリストに似ることである。キリストの父なる神は、キリストと結びついた私たちに對して、父として接して下さる。私たちは神の独り子キリストを長男とする神の子たちであり、神の子として、父なる神の愛をいつも受けている。キリストに注がれている父なる神の愛を、いつも受けることによって、私たちは神の子として、神の御子であるキリストに似た者となるのである。

御父を愛し、御父から愛されたキリストと私たちが神秘的に結合することにより、私たちは、愛においてキリストに似る。御父とキリストの間で交わされる愛の充溢の中で、キリストに似るのである。神に愛されている喜びの中で、神と人を愛する者へと造りかえられていくのである。これは、人を愛することができない悲しみに涙する中で、そのような私を愛して下さる神の愛を経験することの積み重ねによって、もたらされる。

キリストに似る第二の段階は、高举のキリストに似ることである。キリストの再臨において、私たちは栄光のキリストに似る者に変えられる。十字架で死んだキリストが復活されたように、謙卑のキリストに似る下降の道は、再臨のキリストの現れと共に、上昇の道へと変わる。その時、被造物全体が更新される中で私たちも栄光のキリストに似る者とされる。死が私たちの終着点ではない。私たちが栄光のキリストの高さまで引き上げられることをもって、聖化は完成する。（岩崎 謙）

テキスト ヨハネによる福音書13章12～20節
カテキズム 子どもカテキズム問32, 33

(単元のねらい)

イエス・キリストは、私たちの贖いとしてご自分の命をささげてくださった。贖いの恵みは、キリストを信じて洗礼を受けることによって、まさに一回かぎりの決定的な出来事として完了している。その贖いの恵みは、キリストの弟子として生きる私たちのなかで、継続的で止むことのない聖化の道をつくる。聖化も、神の無償の恵みのわざ（ウ小教理問答35）であるから、それは決して人間の努力や功績の問題ではない。むしろ、キリストとひとつの命に結ばれる恵みは、キリスト者のうちに新しい生活を生み出す原動力となる。子どもたちの日々の歩みも、キリストの足跡をたどる。自分の生活や、言葉、ふるまいについて、子どもたちもその年齢に応じて、思い迷うことをつづけているはず。そのような思い悩む私たちに、すでにキリストという模範が与えられていることを感謝して受けとめ、キリストとともに、キリストにしたがう生活の祝福を感謝をこめて覚えたい。

「イエスにならうわたしたち」

先週は、イエスさまが、弟子たちの足を洗ってくださったことを学びましたね。イエスさまは、十字架にかかり、私たちの罪の身代わりに死んでくださり、私たちが神の子として生きる恵みをあたえてくださいました。弟子の足を洗うことは、その十字架の恵みをあらわしていました。

弟子たちは、イエスさまのされることを、ポカンとして見ていたのでしょうか。自分の目を疑うような気持で、イエスさまのされる様子を見ていたのでしょうか。ところが、弟子たちの足を洗って席についたイエスさまは、言われました。

「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」(14)。「主であり、師であるわたし」。イエスさまは、私たちの主です。私たちを罪と死のなかから救い出してくださいました、まことの神さまです。そして、イエスさまは私たちの先生（師）です。学校にも教会にも「先生」がいます。また世のなかにはいろいろな「先生」がいます。でもほんとうの意味で「先生」と言える方は、ただひとりイエス様だけです。

そのようなまことの主であり、ほんものの先生であるイエス様が、弟子たちの足を洗ってくだ

さったのです。それならば、イエス様の「弟子」である私たちは、イエス様がされたように、ほかの人の足を洗う人になりなさい、と命じておられます。イエス様の弟子たちは、おたがいにイエスさまがされたように、足を洗うひとになるのです。

「足を洗う」。それは実際に友だちの「足」を石鹸やタオルをつかって洗う、ということではありません。イエスさまが、弟子たちの足を洗ってくださったとき、イエスさまは弟子たちに仕える奴隷のように、自分を低くしておられました。人の足を洗うためには、自分の姿勢を低くし、体を折り曲げるようにしなければなりません。ふんぞり返って、威張り散らしているようなところでは、とても足を洗うことなどできません。

イエスさまが求めておられるのは、まず他の人に対して、低いところ、謙遜なところ、へりくだった愛のころをもつことです。インドで、もっとも貧しい人々のためにその生涯をささげた、マザー・テレサという女性のことは、知っているひとも多いでしょう。食べるものもなく、道端で死んでゆく人びとが、いまもインドをはじめ世界の国で、数え切れないほどたくさんいます。私たちは、ふだん、そのような人びとのことを忘れてい

ますが、マザー・テレサのような大きな愛をもつ人のことを学んで、思い出すことが必要です。

「私たちは、のけものにされ、愛されず、嫌われている人びとに、やさしい愛の手をさしのべてお世話しています。それが、世界での私たちの使命なのです。イエスさまが、この世に来てくださいましたから、私たちも、そのイエスさまの愛を選びつづけるのです。神が、世を愛していらっしゃることを証しするために、イエスさまは、つかわされたのです」(『生命あるすべてのものに』、講談社現代新書)。

イエスさまは、神様の愛を伝えるために、私たちの先頭をあるいてゆかれました。そして、イエスさまを信じる人びとが、イエスさまのあとについてくることを願っておられます。

それでも、だれかを愛するということが、なにかとてもむずかしいことに思えます。私たちは、自分の気持を抑えることができなくて、怒ったり、うらやんだり、ときには憎しみをいだくこともあります。そんな自分をふりかえって、なんと私はイヤな人間だろう、と悲しくなることが多いのです。それなら、イエスさまのあとを付いて行くのを諦めるでしょうか。イエスさまの弟子になることを、やめてしまうのですか。けっして、そんなことはできません。イエスさまのあとに従うことをやめて、私たちはいつたいだれのところに行け

ばよいのでしょうか。イエスさまこそ、永遠の命をもつ神さまです。イエスさまの歩かれた道こそ、ほんとうの人間の道です。

「霊の結ぶ実(み)は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です」(ガラテヤ5章22、23節)。これは、聖霊がどんな実をむすぶかを記した言葉です。ちょっとむずかしい言葉でしたが、どれか一つでも分かる言葉がありますか。「喜び」「平和」は分かりますね。喜んで生きること。不平や不満ではなく、平和なところで生きることが、イエスさまのあとに続くひとの大事なすがたです。ほかのひとが、なにか私たちに迷惑をかけるときに、すぐに怒ったりせずに、がまんするところも、聖霊がくださる実(み)ですよ。

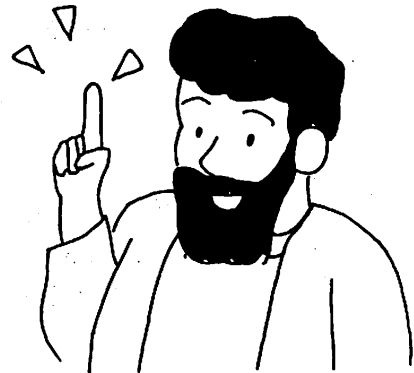
『こどもさんびか』(2002年改訂版、日本基督教団出版局)に、「主にしたがうことは」(主にしたがうは)がありますね。その1節にはこうあります。

「主にしたがうことは なんとうれしいこと
心の空 晴れて 光は照るよ
主のあとにつづき ともに進もう
主のあとにつづき 歌って進もう」

主イエスにしたがう生活は、ほんとうはなによりも楽しくうれしいことです。くらいこころも明るくしていただけますね。(小野静雄)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書13章14節

主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、
あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。



〈主題〉

イエスさまの恵みによって、神の子の完成に向かって歩いていく。

〈ねらい〉

イエスさまは、わたしたちひとりひとりをまっきたき神の子としてくださることを知る。

〈展開例〉

みなさんは、新しい服を着るとき、なんだかうれしい気持ちになりませんか。イエスさまはわたしたちひとりびとりに、とっておきの、新しい服を着せてくださいます。それは、「救いの服」です。この服は、わたしたちのところが汚くても、ただ、「イエスさま、どうか、このみにくいところをゆるしてください」と、あやまるときに、与えられる「永遠の服」です。

ですから、この服をイエスさまから着せられ人は、決して、この服を自分で脱ぐことはできません。

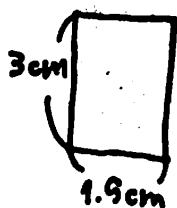
ん。かえって、この服のきよさに似合うように、すこしずつ、こころのなかから新しく、きよいものとなっていくことを、お祈りしていくように変えられていきます。ちょうど、学校に入学して、卒業していくように、みなさんも人生の入学をして、ずっと、イエスさまの学校で大きくなって、死でも、イエスさまのまたこられるときに、みにくいところもからだも、まったくきよめられて、イエスさまのよみがえられた体、神さまの栄光に満ちた体に変えられるのです。ほんとうにうれしいことですね。みんなといっしょにまっきたき神の子となりましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、あなたの子として、かんぜんにきよくなることができますように。イエスさまのとういお名前によってお祈りいたします。アーメン。

♡ ペットボトルから ビーズ かざりをつくらう

- ① ペットボトルの真ん中のところを切り取る
(ボコボコしているところは 使わない)
- ② 油性マジックで切り取った ビーズのもとに ひとつひとつ 絵かきもようを描く。
- ③ ビーズのもとを 絵が描いてある方を上にして アルミホイルの上に並べ オブントスターで 焼く。
- ④ くる、くる、と丸まった ビーズをつがって くびざりか プレスリッドをつくる



← ペットボトルは
さいしよ
この大きさに切る。

〈ねらい〉

先週とセットで、私たちの信仰の歩みについて覚える。

〈分級教師へのアドバイス〉

ここでも、罪の赦しとの因果関係の順番に注意し、また子どもたちの人間関係に注意しなければなりません。子どもたちの人間関係は、大人の想像以上に冷たいことがあります。無理に、親切にするように「強要」すると、かえって反発を生むかもしれませんので気を付けましょう。

〈展開例〉

①今日の聖書のお話は先週の続きでしたね。先週のお話を覚えてるかな？

- ・覚えてない
- ・イエス様がお弟子さんの足を洗った

②弟子たちは、びっくりしてましたよね。そしてその後イエス様は、弟子たちに「あなたがたも互いに足を洗いあわなければならない」とおっしゃったんです。

③イエス様は、お弟子さんたちだけでなく、私たちにも同じように「私があなたがたにした通りに、あなたがたもするように」とおっしゃっているんですよ。
さあ、じゃあみんなは、お友だちに何をしてあ

げる？

- ・足を洗ってあげる

④残念でした。

イエス様がお弟子さんたちの足を洗ったのは、人が一番いやがる仕事を人のためにしてあげることが大切なことを教えるためだったんですよ。だから、イエス様のようにするというのは、みんなお友だちを大切にするということなの。

⑤みんなは、何がお友だちの喜ぶことだと思う？

- ・親切にする
- ・仲良くする
- ・おやつを分けてあげる

⑥みんなお友だちと喧嘩したり、いじめたりしないで、お友だちのことを大切にしていなければならないね。

そうやってお友だちや他の人たちと仲良くできることをイエス様も持っていてくださるんですよ。

〈祈り〉

天のお父様。イエス様が私たちのことを大切にしてくださり、私たちの罪を赦し聖めてくださったように、私たちも私たちの周りの多くの人を大切にしていけるようにしてください。
イエス様の聖名によってお祈りします。

✂ ワークシート ✂

✝ 聖書をひらいて(ヨハネ13:12~20)

ユダ(ゆだ)の文字を消してください。同じ絵文字には同じ文字を入れてください

ぼ	わ	♪	だ	た	♪
	だ	ら	に	も	ゆ
ら	な	ゆ	♪	だ	
ゆ	け	い	し	た	ゆ
	だ	♪	だ	が	た
い	れ	ゆ	を	い	が



✝ かんがえてみよう

質問①「たがいに足を洗い合わなければならぬ」と、おっしゃったイエスさまは、何を弟子たちに伝えたかったのでしょうか。

✝ いってみよう (しかくで、囲んだ部分は、見ないで言えるようにしましょう)

問 33 聖化の歩みとは何ですか。

答 神さまの子どもとして、罪に死に、神さまの御子イエスさまのお姿に似せられていくことです。 神さまに愛されている喜びのうちに、私たちが神さまを愛し

て歩みます。

✝ やってみよう

イエスさまは、わたしたちの模範となってくださいました。「あなたがたもするようにと、模範をしめしたのである。」(13:15)わたしたちが、「イエスさまにならう者」ものになるために、たとえば今週どんなことをしたいか話し合ひましょう。家族に、友達に、教会学校の仲間に…。どんなに小さくてもかまいません。来週の報告を楽しみにしています。聖霊なる神さまに助けられて・



〈聖書をさらに深く〉

1. 聖書の中のどのようなイエスさまのお姿にあこがれるでしょうか。説教しておられる力強いお姿、病人をいさやれる頼もしいお姿、子どもたちを抱き上げておられる優しいお姿、どれも私たちがあこがれるイエスさまのお姿です。そのような中で、イエスさまが特にはっきりと模範として示されたお姿が、この弟子の足を洗われるお姿です。そこには、イエスさまのへりくだりと、そして大きな愛がありました。これこそ私たちが見習うべきイエスさまのお姿です。実は、説教されるお姿も、いやしをされるお姿もすべて、それらはイエスさまの愛のお姿です。私達も、生活のあらゆる場面において、このへりくだりと愛の姿に倣わなければなりません。

〈教理を響かせるために〉

1. イエスさまのお姿に倣う聖化の歩みは、生涯をかけて、しかも地上の生涯においては完成されることのない戦いの歩みとして続きます。中学生という年頃は、いい加減なところがありつつも、完全な理想を求める純粋さをも併せ持つところがあるでしょう。聖化という課題の前に、大人以上に悩むことがあるかもしれません。教理的な正しい理解をまずは確認しておきましょう（特に大教理77～81）。
2. 聖化において大事なことは、行いやふるまいである前に、内面的な事柄です。つまり、イエスさまとの人格的なふれあいの中で培われていく、喜びであり、愛であり、感謝です。特に、ハイデルベルク信仰問答は、救われた者の歩みは全生活にわたる感謝の歩みであるとしています（問86）。こうした内面的な成熟は、御言葉に親しむことと祈りから生まれてきます。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

7日（月曜日）

テトスへの手紙2章1～10節

Q. 若い男にはどのように勤めるべき？

8日（火曜日）

テトスへの手紙2章11～15節

Q. キリストが御自身を献げられたのは、わたしたちを何から贖い出すため？

9日（水曜日）

テトスへの手紙3章1～7節

Q. 神は救い主イエス・キリストを通してわたしたちに何を豊かに注いでくださる？

10日（木曜日）

テトスへの手紙3章8～15節

Q. 神を信じるようになった人々は、何に励もうと心がける？

11日（金曜日）

フィレモンへの手紙1～7節

Q. この手紙を書いているのは？

12日（土曜日）

フィレモンへの手紙8～25節

Q. この手紙は誰のことでフィレモンにお願いがされている？

○心に残った言葉を書き出してみよう。